

現在も継続する災害の 博物館展示に関する一考察

東日本大震災・原子力災害伝承館 学芸員 瀬戸 真之

1. はじめに

地理的に見て日本は4つのプレートがぶつかり合うという世界でも希有な場所に位置している。プレート境界の上に立地するという土地条件から、火山噴火、隆起山地での土砂災害が頻発する。また、日本の気候的は温暖湿潤気候であり、四季が明瞭で降雨や降雪があり、さらには台風の来襲もある。こうした気候条件から豪雨による洪水や豪雪などの災害も頻発する。

上記のような国土であるので、日本人は歴史的に災害と対峙してきた。例えば木曾川流域に良く見られる輪中、関東平野等にある水屋は洪水災害に備えたものである。この他、石垣島など南西諸島で見られる石垣や屋根は台風来襲時の強風に備えたものと言える。さらに土石流を「へび抜け」と呼んで恐れるなど歴史的に日本で取られてきた災害対策は多く、さらには生活の一部となっており、ある種の文化と言えよう。

かつて、災害の記憶や記録は家や集落（村）単位で継承され、それ故に地域に密着した情報であった。こうした情報が持つ範囲は伝え手の家あるいは活動範囲にとどまる反面、小さな河川、山の斜面の特定範囲などローカルな情報を多く含み、代々同じ場所で生活するには非常に有益な情報であった。

歴史が進んで、核家族化が進んだり、進学や就職で代々同じ場所で生活するというスタイルが崩れてきた。例えば高度経済成長期に新しく開発された土地に住む人々は自分たちが家を建て、暮らしている土地のローカルな災害史や災害の情報にアクセスすることは困難であるし、そのための専門知識も持ち合わせていないことが多いと思われる。

近年になり、災害後の被災地域に博物館施設を建設し、記憶や記録の風化を防ぐ試みが徐々に増えてきた。例えば人と防災未来センターは阪神淡路大震災を伝えるとともに災害研究や防災への社会貢献にも取り組んでいる。2011年3月の東日本大震災の後には被災地である東北地方太平洋沿岸を中心に災害伝承施設が官営、民営問わず多くオープンした。有人の博物館施設に限らず、災害伝承碑なども多く作られるようになった。このような災害伝承は、かつてのローカルな災害伝承とは異なり、社会教育の様相を呈している。かつては極めてローカルに（例えば口伝や文書など）行われていた災害伝承が広域化し、幅広く多くの人に伝える災害伝承へと変貌したのである。

上記のような中で成立した災害を取り扱う博物館施設には従来の博物館にはなかったさまざまな課題を抱えている。

2. 災害資料の収集と保全

本節では博物館展示となる資料の収集についての課題を挙げたい。一般に博物館に収められている資料にはその資料が属する分野の中で、ある程度の価値（展示する価値、収集する価値、時に市場価値）が認められている。災害博物館の場合、被災前の地域、被災時さらには復興の様子を伝えるものに価値を見いだすことは非常に難しい。例えば避難所の様子を伝えるものとして避難所に貼られていた貼り紙を収集することは容易であり、収集することの是非について担当学芸員が迷うことはほぼない。他方で、食事の痕跡や古新聞、使用されなかった支援物資などは一見するとゴミであり、そこに価値を見いだして資料として収集するには学芸員の見識や経験が問われる。もっと簡単に述べれば災害資料収集に従事する学芸員には、ゴミに見える資料が将来的に資料価値を持つことを予見する想像力が求められる。



写真1 資料収集現場の一例（2024年5月26日 筆者撮影）

写真1は資料収集に入った現場の一例である。この場所は商店で地元の人に非常になじみ深かった。東日本大震災発災時の地震による激しい揺れとその後の年月の経過により、このような状況となった。この中に博物館展示に活用できる、あるいは収集保管して未来につなぐ、さらには研究（分野は問わない）で使われるかも知れない資料はあるだろうか。災害をテーマとする博物館の資料収集ではしばしばこのような現場に遭遇する。写真1の例で言えば、この商店でだけ流通していた醤油、調味料、取引先の一覧が記載された紙、発災当時の貼り紙などを収集した。取引先の一覧からは原子力災害で失われた地域の姿を垣間見ることができるし、商店オリジナルの醤油や調味料もまた失われた生活を思い出す記憶・記録となる。この現場は取り壊しが予定されており、この機会に収集しないと残されたものは永遠に失われてしまう。このため、収集資料の選別は非常に慎重に行う。この時収集した物品の一部は東日本大震災・原子力災害伝承館の中で「被災前の暮らし」というコーナーに展示されている。この他、長期避難で廃校となった学校では校章や校歌などが書かれた物品が貴重な資料となる。尋常小学校時代を経験している古い学校が多く、そうした学校は地域に根ざしている。大規模災害により失

われていく地域の中で学校はある種のシンボルであり、地域アイデンティティとなっていることがある。博物館施設としては、そうした歴史ある、地域シンボルであった学校が災害によって失われたことを展示すると共に、離散した地域住民の求めに応じて活用するために校章や校歌を収集するのである（写真2）。

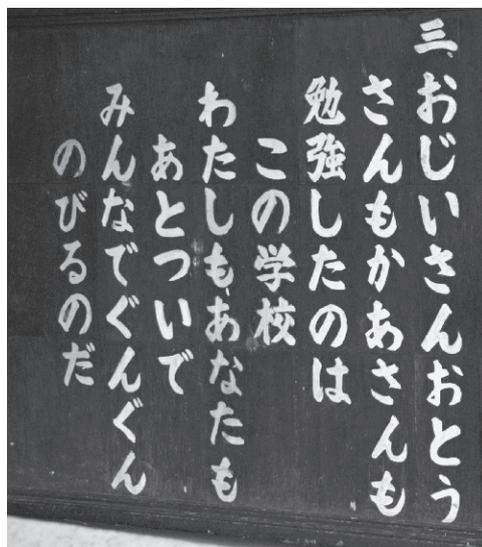


写真2 旧浪江町立大堀小学校校歌の一部

さて、上記のようにして収集した資料は博物館に運び劣化しないよう保全処置を行う。エキヒュームSは使えなくなりましたが、使える間はすべて燻蒸していた。埃まみれであるので、虫やカビ菌を殺すことは非常に重要である。最大の問題は燻蒸した後に、どのように取り扱えば劣化しないで保存することができるか、という点である。和紙（こうぞ）に墨で書かれた文書は数百年あるいは千年を超えても読むことができるだろう。しかしながら災害で取り扱う現代的な資料は、化学物質が使われていたり、そもそも素材の種類が不明なことが多い。コピー用紙にレーザープリンタで印刷された文書はいつまで読めるのか、プラスチック（と思われる）容器などの保存方法は、など不明なことが多い。また、近年の災害では携帯電話を始めとするデジタルデバイスの普及に伴って、デジタル画像や動画の状態でも収集することも多い。代表的な画像フォーマットであるJPEGはその仕様上、ファイルを開いて保存する度に劣化する（不可逆圧縮）。このため、東日本大震災・原子力災害伝承館ではなるべくTIFF画像を残すようにしている。ただし、オリジナルがJPEGの場合にはそのまま保存している。

JPEG、TIFF、MP4などデジタルデータのフォーマットがいつまで残るのかは判然としない。さらにDVDやブルーレイといった媒体にデータを保存しても（半）永久的にデータを残すことができないことが明らかになっている。そうなるとデータのコピーを繰り返して後世に繋ぐしかない。このコピー作業の中で劣化したり失われたりといった資料価値の減は避けられないと思われる。上記に述べたように災害をテーマとした博物館施設では収集から保管までさまざまな課題が山積しており、各地の館が連携してノウハウの蓄積を図ることが望まれる。

3. 展示制作上の課題

災害をテーマとする博物館施設において展示製作をする際には、写真の選択や解説文に注意を要する。これは被災者、(利害)関係者が存命であり、発災からの時間経過が短いことが最大の理由である。例えば学校がなくなる場合には「廃校」という言葉が正しい。しかしながら「廃」という言葉(文字)に敏感に反応する住民もおり、「閉校」と書くことがある。一般に「廃校」は完全になくなることを指し、「閉校」の場合には再開や建物の学校以外の用途での利活用が想定されるようである。廃校では印象が悪いし、寂しいということが背景にあるのかも知れない。

上述のような言葉遣いは展示製作の全ての場面で考慮することが求められる。東日本大震災の避難者は現在でも2万人を超える。こうした中で「復興した」と完了形で書くことはできない。「復興しつつある」「復興が進んでいる」と書く必要がある。学芸員としては慎重になる部分である。

東日本大震災・原子力災害伝承館では館の名称にもあるように原子力災害を取り扱っているが、原子力災害には加害者と被害者がおり、現在も係争中の案件もある。また被災者の目線、行政の目線、事業者(東京電力HD)の目線等、立場によってそれぞれ違った姿をした災害であり、事故である。このような状況の中で全体を見渡して展示製作するとある種「どの立場の人が見ても差し障りのない」展示物が出来上がる。しかしながら、差し障りのない展示は往々にしてピントがぼやけており、展示制作者が伝えたいことを来館者に伝えることが難しくなってしまう。図表、写真、キャプションに至るまで、誰が見ても差し障りなく、かつ事実を的確に伝えることは容易ではない。

上に述べた他、災害伝承館が取り扱う資料には著作権、肖像権、個人情報などがネックとなって収集しても展示できない資料が非常に多い。後ろ姿が小さく写っている写真であっても、地元の人が見ると誰が写っているかが容易に特定できる例もあった。この時には展示を取りやめた。

4. 災害をテーマとする博物館の課題

上に述べた課題は災害を取り扱う博物館全てに当てはまるものではない。ただし、近代的な資料を取り扱ったり、発災後の時間経過が短い災害をテーマとする館には共通の課題となる。冒頭述べたとおり、博物館には防災・減災の社会教育に資することが求められる館が増えつつある。そうした中で、資料の種類(価値付け)や展示製作の手法など従来の博物館があまり経験してこなかった問題がでてきている。こうした問題をいわゆる「博物館学」の中で取り扱えないのではないか、と筆者は考えている。災害をテーマとする博物館が資料収集や展示製作をする時に出てくる諸課題は文理問わず分野横断的に検討するべきであるし、同時にノウハウの蓄積や館同士の共有が求められる。